

Studie über deutsch-jüdische Schriftsteller der Gegenwart

Yoshitaka TOYAMA

戦後の現代アメリカ文学においては、シンガー、サリンジャー、マラマッド、ペロー、ロスのようなユダヤ系作家の活躍が目立ったが、ドイツ語圏においてはむしろ逆である。

ヒトラー出現以前、ユダヤ系作家がドイツ文学の中に大きな位置を占めていたことは周知の事実といってもよい。特にオーストリアにおいてはユダヤ系作家が文壇の主導権を握っていたといっても過言ではない。しかしヒトラー以後、つまり1945年以後は、ドイツ・ユダヤ系の作家にとって事情は一変した。ドイツ語はかつて彼ら自身を迫害した者達の〈仇敵〉の言葉になってしまったのである。それでも戦後まで生き残ってドイツ語で書き続けた作家には、ゼーガース (Anna Seghers), ラングゲッサー (Elisabeth Langgässer), ザックス (Nelly Sachs), フリート (Erich Fried), トアベルク (Friedrich Torberg), ハイム (Stefan Heym), ツェラーン (Paul Celan), シュピール (Hilde Spiel), ヴァイス (Peter Weiss), ヒルデスハイマー (Wolfgang Hildesheimer), ヴァイル (Grete Weil), カネッティ (Elias Canetti) 等を挙げることができる。これらの作家はいわゆるホロコースト世代で、ナチの時代には既に成人していた。これに対して現代のドイツには、戦後生まれの全く新しいドイツ系ユダヤ作家が育ってきている。その代表者としてゼーリヒマン (Rafael Seligmann) とビラー (Maxim Biller) が挙げられるよう。この世代には、当然のことながら戦時子供であったベッカー (Jurek Becker), その他ヒルゼンラート (Edgar Hilsenrath), ホーニヒマン (Barbara Honigmann), ディッシェ (Irene Dische), エドヴァードソン (Cordelia Edvardson), ヘアマン (Mathias Hermann) 等も研究の対象となる。本研究は新世代のユダヤ系作家群に焦点を当てて、文学におけるドイツ・ユダヤ共生の可能性を探ることを目的にしている。初年度はこれら作家の作品を渉猟し、モチーフ、テーマ、プロットに共通因数的なものがないかどうかを探ってみた。想像できたことではあったが、それは多くの場合、ナチス時代の過去と関係していた。そのためこの観点にたつて、

現代ドイツ・ユダヤ系作家研究

ドイツ現代文学が「過去の清算」を如何に扱っているかをテーマに次の論文（独文）を発表した次第である。

[Anwendungsmöglichkeiten der deutschen
Gegenwartsliteratur im Deutschunterricht in
Japan明治大学教養論集269号（1994年12月発行）
p. 13-p. 37]